

FormCopy に基づく制限関係節の（非）再構築効果の分析

齋藤章吾

1. 導入

英語の制限関係節は、主要部名詞 (Head Noun, HN) を関係節内で解釈する再構築効果と、関係節外で解釈する非再構築効果の両方を示すことが知られている。(1a)では、HN 内の照応形が関係節内で束縛される再構築効果が得られる。一方(1b)では、HN 内の指示表現が関係節外で解釈される（関係節内の空所の位置で同一指示の代名詞から束縛を受けない）非再構築効果が得られる。

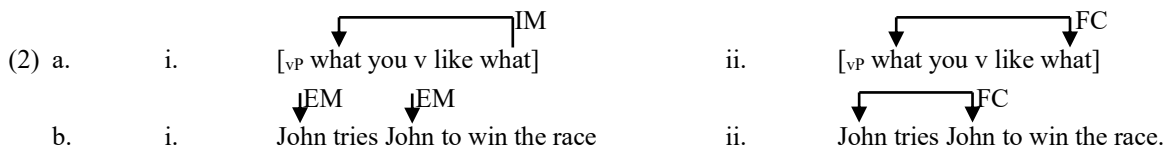
- (1) a. the [picture of himself_i] [that John_i likes __]
- b. the [picture of John_i] [that he_i likes __]

本発表では、制限関係節の（非）再構築効果に対して、Chomsky (2021) の提案する FormCopy に基づく分析を提案し、制限関係節に関する経験的事実を捉える説明を試みる。

2. 仮定

2.1. FormCopy

本発表ではまず、Chomsky (2021)が提案する FormCopy (FC) を採用する。これは、「フェーズ内で c 統御関係にある同一の要素に対してコピー関係を付与する」プロセスである。当プロセスは、従来の内的併合 (Internal Merge, IM) に伴うコピー形成 ((2a)の wh 移動の派生を参照) に加えて、外的併合 (External Merge, EM) で導入された 2 要素間のコピー形成 ((2b)のコントロール構文の派生を参照) も認めるものである。



2.2. Label-Based Identity

本発表は次に、FC の適用に関わる同一性について、ラベルに基づく(3)の定義を採用する。

- (3) ラベルの情報（ラベルの連鎖）に基づいて同一性が評価される。 (Saab (2022))

この同一性の定義は、sprouting という省略現象を説明するために提案されている。sprouting とは省略箇所が先行詞に含まれない要素を伴う省略現象で ((4)を参照、(4)では省略箇所が先行詞に含まれない what の lower copy を伴う)、一見すると省略に求められる先行詞-省略箇所間の同一性条件に違反する現象である。

- (4) John ate, but I don't know what John ate what.

Saab (2022)は sprouting に対して、(3)の定義と共に、(5)の構造分析に基づく説明を行っている。(5)では、範疇素性と LF 解釈可能素性（角括弧で囲まれた下付き文字部分）が投射すると仮定している。（議論を簡潔にするため、ラベルの表記方法は Saab の分析から変更している。）

- (5) a. [TP_[past] [DP_[Def] D_[Def] N(P)_[John]] T_[past] [VoiceP_[Agent] [DP_[Def] D_[Def] N(P)_[John]] Voice_[Agent] V(P)_[eat]]]
- ラベル i. TP_[past] - DP_[Def] - D_[Def] ii. TP_[past] - DP_[Def] - N(P)_[John]
- iii. TP_[past] - T_[past] iv. TP_[past] - VoiceP_[Agent] - Voice_[Agent]
- v. TP_[past] - VoiceP_[Agent] - V(P)_[eat]
- b. [CP_[Q] [DP_[what] D_[what] N(P)] C_[Q] [TP_[past] [DP_[Def] D_[Def] N(P)_[John]] T_[past] [VoiceP_[Agent] [DP_[Def] D_[Def] N(P)_[John]] Voice_[Agent] [VP_[cat] V_[eat] [DP_[what] D_[what] N(P)]]]]]
- ラベル i. TP_[past] - DP_[Def] - D_[Def] ii. TP_[past] - DP_[Def] - N(P)_[John]
- iii. TP_[past] - T_[past] iv. TP_[past] - VoiceP_[Agent] - Voice_[Agent]
- v. TP_[past] - VoiceP_[Agent] - VP_[cat] - V_[eat]

(5)では、先行詞構造の top node (TP) から各省略要素までのラベルの連鎖と、それに対応する省略箇所（下線部）のラベルの連鎖が一致している（ここでは first merge 要素の V(P)_[eat]は最小投射であり、かつ、最大投射でもあると仮定し、VP_[cat] - V_[eat]と同一とみなしている。また、John や what の lower copy には省略とは独立にコピー削除が適用されると分析する)。そのため、当該範囲の同一性が成立して省略が認可されると分析される。

本発表では、このラベル情報に関する同一性に基づいて FC が適用されると仮定する。

2.3. (コピー) 削除に課される条件

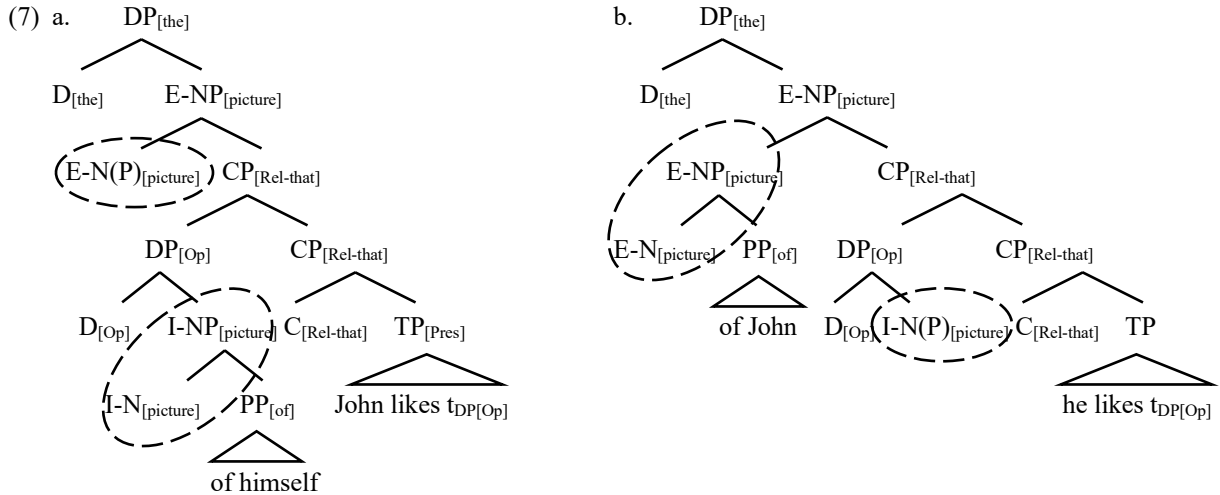
従来、削除操作は、削除対象が復元可能な場合にのみ適用されると仮定されている。Chung (2006)などの先行研究では、統語要素の削除に関する条件として(6)が提案されている。

(6) 削除される要素は復元の source (省略の先行詞、具現化されるコピー) に存在しない要素を含んでは
ならない。(source に存在しないものは還元不可能なため。) (cf. Chung (2006))

本発表では、(6)に基づく、(一般にコピー削除は低い位置のコピーに適用されるのに対し、) 高い位置のコピーの削除が求められる場合もあると仮定する。

3. 提案

本発表は、制限関係節に対して、関係節外の NP (External NP, E-NP) とそれに対応する関係節内の NP (Internal NP, I-NP) を含む構造を提案する。また、再構築効果を要求する要素は I-NP のみに生起し、非再構築効果を要求する要素は E-NP のみに生起すると提案する。



(7)において、点線で囲んだ E-NP(N(P))_[picture] と I-NP(N(P))_[picture] の要素は同じラベル情報であり、かつ、c 統御関係にあるため、FC が適用され、いずれか一方がコピー削除の対象となる (E-NP(N(P)) と I-NP(N(P))) は PP の有無に関して構成要素構造が異なるが、関連部分の「ラベル情報」は同じであり、同一性が成立する。(7a)では I-NP が E-N(P) に含まれない PP を伴うため削除対象とならず、E-N(P) が削除される。一方(7b)では E-NP が I-N(P) に含まれない PP を伴うため削除対象とならず、I-N(P) が削除される。

4. 帰結

制限関係節は、HN の再構築が求められる場合は外置ができないが、HN の再構築が求められない場合は外置ができる。

- (8) a. *I saw the [picture of himself_i ___] yesterday [that John_i liked]. (Hulsey and Sauerland (2006: 115))
b. I saw the [picture of John_i ___] yesterday [that he_i likes]. (ibid.: 120)

この事実は、本発表の提案と(9)の仮定に基づいて説明できる。

- (9) 所与のラベルを持った最大の統語体のみ移動できる。 (Rizzi (2015))

(8)は(10)の関係節構造を持つと分析される。太字は HN として発音される部分を、囲み線は外置部分を表す。

- (10)a. [DP[the] D[the] [E-NP[picture] E-N(P)[picture] [CP[Rel-that] [DP[Op] D[Op] [I-NP[picture] I-N[picture] [PP[of] of himself]]]]]]]
[C[Rel-that] [TP[past] [DP[Def] N(P)[John]] T[past] ... [VP[like] V[like] [DP[Op] D[Op] [I-NP[picture] I-N[picture] [PP[of] of himself]]]]]]]]]
b. [DP[the] D[the] [E-NP[picture] **E-N[picture] [PP[of] of John]** [CP[Rel-that] [DP[Op] D[Op] I-N(P)[picture]]]]]
[C[Rel-that] [TP[past] [DP[Def] N(P)[John]] T[past] ... [VP[like] V[like] [DP[Op] D[Op] I-N(P)[picture]]]]]]]]]

(10a)では外置部分が CP ラベルを持つ最大の統語体ではないため、(9)の制限により移動ができない。一方、(10b)では当該の移動の条件を満たすため、問題なく関係節の外置が容認される。

参考文献

Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160, 1-41.
/ Chung, Sandra (2006) "Sluicing and the Lexicon: The Point of No Return," *Proceedings of the Thirty-First Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, ed. by Rebecca Cover and Yuni Kim, 73-91, Berkeley Linguistics Society, Berkeley CA.
/ Hulsey, Sarah and Uli Sauerland (2006) "Sorting out Relative Clauses," *Natural Language Semantics* 14, 111-137.
/ Rizzi, Luigi (2015) "Cartography, Criteria, and Labeling," *Beyond Functional Sequence: The Cartography of Syntactic Structures*, ed. by Ur Shlonsky, 314-338, Oxford University Press, New York.
/ Saab, Andrés (2022) "Grammatical Silences from Syntax to Morphology: A Model for the Timing of Ellipsis," *The Derivational Timing of Ellipsis*, ed. by Anikó Lipták and Güliz Günes, 170-224, Oxford University Press, Oxford.